

ウィラ・キャザーの『大司教に死は来たる』における 白色のイメージリーの手法

日 下 洋 右

The Technique of White-colored Imagery in Willa Cather's
Death Comes for the Archbishop
Yosuke KUSAKA

『大司教に死は来たる』(*Death Comes for the Archbishop*) (1927) は、1848年ニュー・メキシコがアメリカ合衆国領とされたことに伴って誕生した新教区の管轄を担わされた、ローマ・カトリック教会のジャン・マリー・ラトゥール (Jean Marie Latour) 司教 (後大司教) とジョセフ・ヴァイアン (Joseph Vaillant) 司教代理 (後コロラド司教) のヒロイックな活躍の物語である。二人の神父の新教区における秩序の確立と布教活動の任務に焦点が当てられたエピソード群の中に、フランスの故郷で過ごした当時の思い出、神学校時代の追想、五大湖周辺の教区で伝道に従事していた頃の回想、インディアンにまつわる異教伝説、奇跡物語などが織りこまれているので、物語は二様のエピソードが綾を織りなして展開する。しかし、グランヴィル・ヒックス (Granville Hicks) のように、種々入り混じっている挿話の並置に何ら統一性が見出せないと、この手法を疑問視する声もある。¹ さらには、ジョーゼフ・クラッチ (Joseph Krutch) の指摘を待つかでもなく、この小説には挿話を積み重ねるだけでプロットと呼ばれるべきものも存在しない。² ハーミオン・リー (Hermion Lee) が『聖人伝集』(*The Golden Legend*)³ を具体的な例にあげて、エピソード的な構造を分析しているように、⁴ この批評家たちをとまどわせた手法は、聖人伝の技法を採用した結果であるとみてよいであろう。

しかし、冒頭から結末までエピソードを単に連ねるのみで、一貫したプロットや劇的場面や山場を欠いた平板な小説も、イメージリーの多用によって絵のように美しく、生き生きと躍動感にあふれた世界に変えられている。T・K・ウィップル (T. K. Whipple) は他の批評家たちと異なって、この物語ではイメージリーが重要な機能を果たしていることに注目している。

Here, unless it is the pictorial element in *Death Comes for the Archbishop*, is the final triumph of a gift in which Miss Cather has always been eminent, of evoking concrete sensuous imagery, an ability which lends full-bodied solidity as well as beauty to her work.⁵

事実、この作品は、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、温度感覚、筋感覚、神経感覚、臓器感覚 (飢え、渇きなど) などを表す表現で満ちあふれている。これらの感覚表現のうち、色彩や形状を表す視覚的な現象の表現がきわめて多いが、とりわけ色彩感覚に関する表現が多用されていて印象深い。このような色彩感覚に由来する絵画的要素や絵のような美しさがこの作品の特徴である、と指摘する批評家は多い。例えば、ジェイムズ・シュローター (James Schroeter) や E. K. ブラウン (E. K. Brown) は、この小説をアメリカ南西部というキャンバスに描かれた一続きのフレスコ画とみなしており、⁶ グランヴィル・ヒックスは題材が豊富で模様が巧みに描かれたつづれ織りとみなしている。⁷ しかし、見逃してならない肝要な点は、色彩が平板な物語に絵画のように美しく、躍動感に

満ちた印象を与える一次的な機能の他に、シンボリックな意味を伝える二次的な機能を果たしていることである。特に、多様な色彩のうち白色が最も多く用いられている点は、⁸ 主要人物との関係から特筆に値する。

キャザーが生涯取り組んだ問題の一つは、精神的価値と物質的価値との相剋である。この物語でも、物質欲の虜になったり、酒色に溺れたりした土着の神父たちと、欲望を捨て去って、貧困に打ちひしがれた住民と一体となり、絶えず魂の浄化を求める新任の神父たちとの対比の形で、この問題が追求されている。また、砂漠とメーサ（岩層台）が広がる辺境地の過酷な自然と闘いながら、服従を拒否する自堕落な土着の神父たちを一掃したり、貧しい住民の中に飛びこんで、彼らの信仰心を回復させたりする使命の遂行中に会う様々な試練を乗り越える、二人の神父のヒロイックな活躍を通して、この問題が追求されている。そして、この物語では、幾多の苦難を克服して、不撓不屈で高潔な人物へと成長してゆく二人の神父の勝利、換言すれば精神的価値の勝利が謳われている。

精神性の勝利は、中心人物であるラトゥール司教とヴァイアン司教代理を聖人の域へ高めようとする作者の意図と不可分であるとみてよい。その目的を達成させるために、砂漠を横断中に道に迷わせて荒野のキリストの如く飢えと渇きに苦しませたり、不眠に陥るような挫折感を味わわせたりするなどの危難に二人の神父を直面させて、苦闘しながらその困難な状況を切り抜けさせる必要があったのである。その意味では、単に並列されているようにしか見えない多種多様なエピソードも、中心人物の聖人化の布石とみなしてさしつかえない。この見方からすれば、多彩なエピソードにも統一性が認められることになり、エピソードの単なる並置にすぎず、統一性に欠けるのではないかという疑念も氷解するであろう。

物語全体を通して、色彩のうちでも白色が最も多く使用されている点は、ヒーローたちの聖人化と深く関わっている。というのも、ラトゥール司教とヴァイアン司教代理が聖人にふさわしい高潔な人格者である要件を満たすためには、純粹、聖性、崇高、歓喜などの他に、最高の英知や真理などを象徴する白色の使用がきわめて効果的な手段であったとってよいからである。⁹ 作者は人物の心情や精神を描写するのに視覚に訴える。その場合、身体の特徴的な部分とその色彩に焦点を当てることによって、人物の全体像を暗示する手法がとられる。例えば、夫が亡くなって衝撃を受けた上に、遺産争いにまで巻きこまれて嘆き悲しんでいるイザベラ (Isabella) 夫人の姿は、この手法を例証している。

After some time, Doña Isabella entered, dressed in heavy mourning, her face very white against the black, and her eyes red. The curls about her neck and ears were pale, too — quite ashen. (p. 189)

この場面では、黒い喪服を背景にして夫人の頭部に焦点が当てられている。顔の白さは悲しみのあまり血の気の失せた表情を、眼が赤いのは嘆きのあまり泣き暮らした跡を各々表わしている。うなじと両耳のまわりの巻き毛が灰白色なのは、それが苦悩のあまり白髪に変じたことを示している。作者は頭部に注目を払い、三種の色彩を用いて、悲嘆に暮れ悩み苦しみながら喪に服しているイザベラ夫人の様子を端的に伝えているのである。

利己的な欲望を一切放棄し、精神的また肉体的な数々の試練を乗り越えた清廉潔白な人格者であることは、白い手や白い頭などのように白という色彩によって象徴される。ラトゥール司教の人物像を象徴する印象深い表現として、“his fine white hand” という言い方が三度使用されている。手は身体の一部にすぎないが、“fine” と “white” に形容された “fine white hand” には、ラトゥール

司教という人物の全体像がみごとに集約されている。ヴァイアン司教代理が司教の手に注目するのは、この意味に気づいているからである。

His hands had a curious authority, but not the calmness so often seen in the hands of priests; they seemed always to be investigating and making firm decisions. (p. 209)

司教代理が洞察しているように、司教の手には知性、聡明、決断力、威厳などを賦与された司教の性質や態度が暗示されている。

司教の手を形容している“fine”は、繊細で美的な感覚の欠如した醜男ヴァイアン神父とは対照的に、気品を漂わせた端正な容姿、それに繊細な感受性と美的感覚を備えた人物を想像させる。手の色の白さは、精神的にまた道徳的に高潔な人格を象徴している。このように、手そのものに集約されているイメージ、そして形容詞“fine”と“white”のシンボリックな意味を総合すれば、司教という人物像は“fine white hand”というわずか三語に要約されているといえる。

“fine white hand”に象徴されている司教の人物像は、砂漠や峡谷を越えている最中に遭遇する苦難を克服してゆくヒロイックな姿に具体化されている。例えば、パンとコーヒーだけという最低限の飲食物を携帯して、砂嵐や寒さに耐えながら幾日もの伝道の旅が続けられる。その種の旅のうち、司教のすぐれた人柄を知る上で読者の心に訴えるエピソードは、司教が土着の神父たちの不満を抑えて新秩序を確立するために、ニュー・メキシコがメキシコ領であった時代に管轄していた司教の信任状を得ようと、メキシコ領のドゥランゴへ長い旅にでた帰途に出会った出来事である。司教は道に迷って2日間一滴の水も飲めずに砂漠の中を彷徨し、渇きのため極限状態に追いこまれる。この時経験した艱難は、司教が聖人の域に達する条件として彼の肉体に課された最大の試練であったといつてよい。この危機的状況の最中、司教は十字架に磔になったキリストがわずか一言もらした“I thirst”という言葉を想起し、意識から自己の苦しみを消し去って主の苦しみについて瞑想に耽る。キリストの受難が唯一の現実となり、自己の肉体の欲求はその概念の一部にすぎなかったというように、司教はキリストの受難を進んで体得することによって、この危難を乗り切るのである。しかも、驚くべきことに、司教代理が司教を礼節の華と呼んだように、この難局の真只中ですら、司教は^{いんぎん}慇懃な態度を崩すことがないのである。

聖人化はヴァイアン司教代理についても試みられている。司教の人格が手の白さに集約されているのに対して、司教代理のそれは頭の白さに集約されている。司教代理は“Blanchet” (“Whity”) (「白ん坊」)という愛称で司教から再三呼ばれる。この異名は司教代理の身体の中で特に目立つ頭髮の色に由来している。頭髮の白色が司教代理の清浄無垢な人柄を象徴していることは言うまでもない。司教と同様に、司教代理も乏しい飲食物を携行しただけの長期にわたる苦しい布教の旅に幾度も出かける。司教代理は貧しいメキシコ人やインディアンの中へ虚心に飛びこんで、彼らに同化しようと情熱を傾け、彼らの救済に生命をかける。世俗的な野心も物質欲も一切捨てているので、個人の所有物といえば、苦しい宣教の旅を共にするラバー頭だけであり、日常着る衣服といえば粗末で貧弱なものにすぎない。その結果、Father Vaillant was like the saints of the early Church, literally without personal possessions. (p. 227) と司教に言わしめるのである。

「白ん坊」と愛称で呼ばれること自体、ヴァイアン司教代理には親しみやすい性質の一面があることを示しているが、反面「白ん坊」という言い方には、虚弱体質のイメージがつきまとっている。事実、ヴァイアン神父は子供の頃から体が弱く、行く手を阻むような辺境地の大自然と格闘しなければならぬ過酷な任務を遂行できるかどうか、危ぶむ声すらあがっていたほどである。しかし、相容れない性質を持ち合わせているのが司教代理の持ち味であると司教も評しているように、身体

上の弱点を補って余りある特性が強靱な精神力とたぎるような情熱である。広大な砂漠と深い峡谷が続く厳しい自然の中では、司教のように若くて頑健な肉体を備えている者ですら苦難を強いられているのに、体の丈夫でないヴァイアン神父が伝道活動を精力的になしとげられるのは、いかなる苦難にも挫けない不屈な闘志と燃えるような熱情を有しているからに他ならない。住民たちの中へ進んで飛びこんで彼らと苦しみを分かち合い、彼らの信頼と愛を勝ちえるのも、持ち前の親近感に加えて、天賦の精神力と情熱の賜物なのである。この特質こそヴァイアン神父という人物の心髄であり、司教とは著しく対照的な特性である。

ヴァイアン神父の特徴を知り抜いて敬意を抱いている司教は、During their Seminary years he had easily surpassed his friend in scholarship, but he always realized that Joseph excelled him in the fervour of his faith. (p. 226) と神父の情熱を称賛するのである。また、司教代理との最後の別離の時が訪れた際に、司教は“*Blanchet,*” . . . “you are a better man than I. You have been a great harvester of souls, without pride and without shame. . . If hereafter we have stars in our crowns, yours will be a constellation. Give me your blessing.” (pp. 261-62) と、原住民たちの中へ融けこみ、彼らと貧しきや苦しみを共にして、彼らの魂を救うことに生命をかけ、情熱を注いだヴァイアン神父を称えるのである。司教と司教代理の人格の特質から明らかなように、司教を知性型あるいは思考型の聖人とすれば、司教代理は心情型あるいは行動型の聖人といえよう。

ラトゥール神父とヴァイアン神父が聖人の域に高められると、二人の神父の乗るラバ¹⁰ がパール¹¹ のような美しい白色を呈している点も見過ごすことができない。パールのような美しい白色は、清らかな品格のある性質を暗示している。さらに、ラバの贈り主から、“It seems that God has given them intelligence. When I talk to them, they look up at me like Christians. . .” (p. 60) とかされると、二頭のラバは高潔な人格を備えた二人の神父が乗る動物にふさわしい印象を一段と強める。ヴァイアン神父が乗るラバは、情熱の聖者に似つかわしくコンテンツと呼ばれ、司教が乗るラバは天使のように清らかで気高い精神の持ち主に似つかわしくアンジェリカと呼ばれているのも興味深い。ラバに美しい白色が賦与されたことと同様に、意味深長な名称を授けられたのも、二人の神父が聖人にふさわしい崇高な人格者であることを間接的に裏づけたいためである。

白い教会や白い壁に囲まれた部屋などの白い空間は、清潔感、調和あるいは秩序感、簡素感などの統合されたイメージを帯びていると同時に、そこに居住する人物の清浄で高徳な人格をも象徴している。その代表的な例が司教の部屋である。白い水漆喰が塗られた壁に囲まれた司教の書斎の有様は、ラトゥール司教の人物像をみごとに映し出している。

On either side of the fire-place plastered recesses were let into the wall. In one, narrow and arched, stood the Bishop's crucifix. The other was square, with a carved wooden door, like a grill, and within it lay a few rare and beautiful books. The rest of the Bishop's library was on open shelves at one end of the room. (p. 34)

清潔で簡素な上に、整然とした佇まいが漂っている。清潔感に加えて調和感や美感や質素感に支配された部屋の様子には、司教という人物の特性がそのまま反映されている。この部屋の状況の意味は、旧体制の神父たちのうち最大の権力者であるマルティネス (Martínez) 神父の部屋の有様と比較するといっそう鮮明にされる。

マルティネス神父の聖職者としての態度や生活については、新体制の責任者ラトゥール司教を迎えるこの神父とその住民たちの派手な歓迎ぶりに予示されている。神父はマスカット銃を携えて騎兵のような格好をした手下を引き連れて、わざわざ町外れまで新司教を出迎え、祝砲代わりに銃を

大きさに発射する。町へ入ると、住民たちが司教の足元へショールを投げたり、司教の手を取って指輪に接吻するといった大仰で形式張った歓迎行為を繰り返す。このような歓迎の仕方の裏には、マルティネス神父の芝居じみた宗教と派手な生活ぶりが潜んでいる、と司教は見抜く。

Here, these demonstrations seemed a part of the high colour that was in landscape and gardens, in the flaming cactus and the gaudily decorated altars, — in the agonized Christs and dolorous Virgins and the very human figures of the saints. He had already learned that with this people religion was necessarily theatrical. (p. 142)

うわべを飾りたてた宗教と生活様式を支配しているけばけばしい強烈な色彩は、派手さや仰々しさを連想させ、調和、清潔、質素などを連想させる白色とはおよそ異質なイメージを与える。従って、神父の身のまわりに満ちあふれているどぎつい色彩から、神父の聖職者としての人格や宗教生活と司教の人格や宗教生活との著しい差異が容易に想像されよう。

実際、マルティネス神父の人格と生活態度は、書斎の有様に集約されている。机の上にはかぎタバコが散乱している上に、本が山と積み上げられていて、向こう側に掛けてある聖職者にとって最も大切な十字架像がみえないのである。本は机の上だけではなく、椅子やテーブルにも乱雑に重ねられ、しかもその上にほこりが厚く積もっている。この書斎の状況には、清潔感や秩序感や質感にあふれた司教の書斎の有様との著しい差異が認められる。特に、キリスト教の重要なシンボルである十字架像が粗末に扱われている点は、規律のない乱れた生活態度を予示している。大げさな芝居じみた歓迎儀式と部屋の乱雑さから、現世の欲望に取りつかれ戒律と克己心の欠如した自堕落なマルティネス神父の人物像が浮かびあがる。

マルティネス神父の部屋が雑役婦に荒らされていたり、化粧した時の女の髪の毛が部屋の隅に投げ捨てられていたりする見苦しい状況は、この神父の放蕩的な生活ぶりを裏づけている。神父は自己の生き方を正当化するために、司教に向かって聖職者の禁欲否定論と肉欲肯定論を堂々とぶつのである。神に仕える者にあるまじき習慣を横柄に主張するマルティネス神父と、このような悪習やそれを擁護する神父を司教区から一掃して、新体制を確立しなければならないとの決意を表明する司教との対立は、そのまま両者の人格の対立をも表している。

マルティネス神父の欲望は、酒色の域にとどまらない。神父本人は嫌疑をかけられないように、巧妙にインディアンたちを扇動して反乱を起こさせ、彼らが処罰された機に乗じて彼らの土地を取り上げてしまうといった物欲にも取りつかれている。このように、部屋の乱雑な有様に予示されているように、マルティネス神父が世俗の快樂と物質欲に溺れて、聖職に携わる者が本来陶冶すべき人格や生活態度を全く等閑にしている事実は、白色とは対照的なけばけばしい、濃厚な色彩に象徴されている。

土着の神父のうち、司教と司教代理の共感をえている唯一の人物は、白い教会をもち、インディアンの住居のように質素で、清潔な白い家に住んでいる白髪の老神父イエースス・デ・バカ (Jesus de Baca) である。バカ神父が二人の神父から好印象を受けているのは、強欲なマルティネス神父や守銭奴のマリノ・ルチェロ (Marino Lucero) 神父とは違って、教区民に金品をせびって私腹を肥やすような利己的で貪欲な性質を持ち合わせていないからである。事実、バカ神父の白い教会や家の白色に内包されている質素感や清潔感のイメージが既に暗示しているように、神父は純朴で清廉潔白な人物であるため、住民の信頼を勝ちえ、住民と友好的な関係を保持している。

バカ神父のエピソードの存在意義は、この善良な老神父と悪賢いマルティネス神父やルチェロ神父とを比較することによって、両者の人間性の相違を明確にしようとするところにあるのではない。

それは、司教と司教代理がどちらの人物に好意を示しているか、またどちら側を評価しているのかわかるならば、二人の新神父たちが好印象を受けている人物を通して、新神父たちの人間像を間接的に明らかにできる点にある。その意味では、バカ神父の挿話に限らずほとんどの挿話は、二人の神父が聖職者の華となる方向へ収斂しているとみなしてよい。司教と司教代理に直接関わる出来事から二人の人物が分折される一方で、他の人物との対比や関係などによる二人の神父と間接的に関連したエピソードを通して、二人の神父の人物像が明らかにされる手法がとられているからである。

白い花や雪といった白色を呈した自然景観も、純粹無垢なイメージを伝えるのに重要な役割を果たしている。この種の白い色には、物質的には最も恵まれず社会の庭辺に生きているが信仰心の篤い住民や、宗教上正しく導かれていない貧しい住民と心をつにすることによって、キリストの教えや聖母マリアの愛に開眼し、魂が洗われて神聖な喜びを獲得する意味が認められる。白い花と白い雪のモチーフを含むエピソードは、二人の聖職者の聖人化に中心的な役割を果たしているとみてよい。

リングが白い花をつける5月は、ヴァイアン神父にとって単なる自然のサイクルの月ではない。白い花と結びつけられる5月は、魂が浄化される恵み深い月である。というのも、聖職者にとって宗教は純粹な個人的献心であるとする信念から、ヴァイアン神父は5月を長年にわたって聖母マリアに捧げる神聖な月として、宗教生活の中でも特に重大な意味をもたせていたからである。

... all the most important events in his own history had occurred in the blessed month when this sinful and sullied world puts on white as if to commemorate the Annunciation, and becomes, for a little, lovely enough to be in truth the Bride of Christ. It was in May that he had been given grace to perform the hardest act of his life. (p. 204)

ヴァイアン神父にとって、5月は重大な出来事が起こる月でもある。故国フランスでは、神父が愛する祖国と肉身に身を切られる気持ちを抱きながら別れを告げて、宗教の開拓という事業に情熱を燃やし、いかなる艱難にも打ち勝とうと固く決意して、はるか彼方の新世界へ旅立つことになったのは、他ならぬ5月のことである。この出立時の情熱と決意とを新天地で強烈に再認識することになるのも、この5月なのである。というのも、敬虔な信仰心にあふれているが、キリスト教に触れて正しく導かれていないメキシコ人たちにキリスト教を授けて彼らを救済することに、ヴァイアン神父は情熱を傾けるからである。また、アパッチ族に村を略奪された際に、ミサ用の備品を隠したまま何世代もの間、キリスト教との接触を拒まれたピマインディアンを神のもとへ返すことが、ぜひともなしとげねばならない責務であり、それが人生最高の幸福であるとまで、司教代理は言い切るからでもある。こうして、水分不足のために種が発芽しない植物のように、現世の欲望とは全く無縁であり、物質的には全く恵まれないが、篤い信仰心が埋もれたままの住民たちに融けこんで彼らと心をつにすることによって、ヴァイアン神父は *Unless ye become as little children.* (p. 206) というキリストの言葉の意味を悟るのである。

ラトゥール司教も新教区の責任を背負って数年後、精神的に最大の危機を迎える。ヴァイアン神父の重大な月が5月であったが、司教が社会の底辺に暮らしている住民と出会って、この危機を乗り越える契機となる出来事が起こるのは12月の雪の夜のことである。クリスマスも間近のある夜、司教はニュー・メキシコ司教区の責任者としてサンタ・フェに赴任して活動を開始して以来、己の努力が砂の上に建てられた家のように空しいものに思われ、深刻な挫折感に襲われて眠ることができない。司教は祈りを捧げてこの苦境から逃れようと、庭の向かい側にある教会へ向かう。庭は雪

に一面おおわれて白一色である。司教は聖物納室の入口で、みずぼらしい身なりをしたメキシコ人の老雑役婦サーダ (Sada) に出会う。司教は老婦人を聖母の小聖堂へ案内して一緒に祈る。法悦の涙を流すサーダから、司教は貧困生活に喘ぐ人間にとって、祭壇に立っているロウソク、マリア像、聖人像、十字架像が貧しさを超越する唯一の拠り所であることに気づかされる。

サーダのようにこの世の辛苦を背負わされた女性の苦しみを理解しえるのは、聖母マリアだけであり、そのような女性には聖母の存在そのものが糧であり、衣服であり、友であり、母であることを司教は認識し、マリアの深い憐れみの心と愛の深意を悟ることになる。その結果、司教はサーダの心の中で起こった奇跡を受け入れ、サーダの目をもって物事を見つめ、司教自身もサーダと同様赤貧洗うがごとき存在であることに気づかされるのである。これは、司教代理がメキシコ人と一体化できたように、司教も貧苦の十字架を背負わされたこの老女の境地に立つことによって、聖母マリアの意味を悟ることができたことを示している。それ故、司教はサーダの信仰の深さに感動し、この教会はサーダの教会であり、己はその下僕にすぎないと語るのである。サーダと出会って、*“And whosoever is least among you, the same shall be first in the Kingdom of Heaven.”* (p. 218) という真理を会得しえたことによって、司教は挫折感を克服して、人格者としても聖職者としても円熟の境に入ったことを示している。

嵐のように乱れていた司教の精神状態も、信仰によって貧苦を克服するサーダと遭遇して、雪の夜の静けさのように平穏な状態を回復する。貧しい人間の篤い信仰心とキリストの教えを悟って、司教は心が洗われ、雪の白さのように清らかな魂を獲得するのである。There is always something charming in the idea of greatness returning to simplicity — the queen making hay among the country girls — but how much more endearing was the belief that They, after so many centuries of history and glory, should return to play Their first parts, in the persons of a humble Mexican family, the lowliest of the lowly, the poorest of the poor, — in a wilderness at the end of the world, where the angels could scarcely find Them! (pp. 282-83) と強い感銘を受ける司教にとって、雪の夜の聖なる悦びの体験は、聖職者としての人生を左右する最も重要な瞬間であったことを物語っている。

この小説には、白色に内包されている清純なイメージが悪用されている例外が一つだけ見出される。布教のためアコマインディアン部落を目指していた司教が高台から目撃したものは、メーサの頂きに方形に形成された白い色をしたアコマの村である。昔からアコマのメーサはナバホ族やパッチ族の人間狩りから逃れる聖域であったと語られる時、白色は清らかでけがれのない神聖なイメージと容易に結びつけられる。司教がメーサを登って頂上に達した時には、俄雨がやみメーサは表面の岩が雨に洗われて清らかな白色を現わし、聖域にふさわしい清浄なイメージを帯びる。

メーサのふもとに、復活祭の時期に飾られる白百合に似た大きな白い花をつけた植物が生えていることに、司教が気づく点に注目する必要がある。白い花がヴァイアン神父にとって聖なる悦びの花であったように、この白百合のような花の白色も、一見メーサの白い岩と同様に神聖なイメージを抱かせる。ところが、この植物が有毒なイヌホオズキの一種であると知られる時、清純なイメージを伝える白い花に不吉な影がちらつく。それが白い絹からつくられた造花のようだと指摘されると、白い花には不自然さが漂い、不純な要素が潜んでいることを匂わせる。不吉で不自然な性質は、アコマインディアンの清浄な聖域をけがす潜在力の存在を予想させる。この白色の異様性に気づくなら、白色がよごされて不純物のまじった色に変色した教会へ目が向けられよう。

白色がくすんだ灰色¹²の床と灰色の壁に囲まれ、灰色の光が注ぐ教会に看取される灰色のイメージには、不浄な暗い影がつきまとっている。実際、一握りの土も一本の樹木も存在しないメーサの上に、土と大きな材木を驚くほどふんだんに使用した贅沢な教会がたっているのである。この豪華

な教会の建立の陰には、灰色のイメージを裏づける証拠が潜んでいる。絶大な権力を握っていた17世紀初期のラミレス (Ramirez) 神父とその跡を継いだ歴代のスペイン人神父たちは、貧困に喘いでいるインディアンたちの生活状況を等閑にして、現世の欲望と自己満足を満たすため、彼らに途方もない苦役を課して、この教会を建設した事実が隠されているからである。

18世紀初期の神父バルタザール (Baltazar) の伝説は、教会の灰色のシンボリックな意味を具体的に明らかにしている。バルタザール神父にとって、アコマインディアンは司祭を支える手段ではない。神父は自己中心的で横暴な野心家であったので、己の欲望をかなえるためには、過酷な労働を住民に平然と強制する。特に、贅沢な生活を送りたいという欲求から、神父は教会の庭園を豊かにしようと自らあらゆる努力を惜しまない。それどころか、そのために神父は住民にまで苦役を強いたのである。しかし、この過度の欲望が命取りとなり、神父は原住民たちによってメーサの断崖から放り投げられる。手入れも世話もされず荒れ放題となった庭園の中で、モモの木の葉が枯れて白くなった状態にある点は注目し値する。この場合の白色は正常な生長過程を経て生じた白さでないため、この白色には物質欲に取りつかれて、アコマの白い聖域をけがした神父の異常な末路が暗示されている。

この小説をジャン・マリー・ラトゥール司教とジョセフ・ヴァイアン司教代理の波乱に富んだ半生を描いた聖人伝風の物語とみなすならば、一見無造作に並置されているようにみえる多種多様なエピソード群にも統一性が認められよう。というのも、聖人伝風の物語とする見方からすれば、それらのエピソード群は二人の神父の聖人化の方向へ集束しているとみられるからである。このような挿話の形成に寄与しているモチーフが、小説の至るところにちりばめられている豊かなイメージャリーである。とりわけ、ラトゥール司教の夢が実現された南仏様式の大聖堂に集約されている司教の伝統的な美意識と密接に結びついて、最も重視されているモチーフが視覚のイメージャリーである。視覚の中でも色覚のイメージャリーは、一貫したプロットや劇的場面や山場の欠けた平板な生地に、絵のように美しい生き生きとした感覚の意匠を織りこんでいる。聖人伝風の物語との関連からそれ以上に興味深い点は、色彩の中でも白色の使用頻度が最も高いことである。最も多く用いられている白色のモチーフは、厳しい試練を乗り越えて獲得した聖人にふさわしい人格や生き方を実に効果的に表象して、この物語を聖人伝風に描こうとした作者の意図を実現するのに重要な役割を果たしている。

注

本文の()内の引用ページ数は、Willa Cather, *Death Comes for the Archbishop* (New York; Alfred A. Knopf, 1950) による。

- 1 At first one is charmed, but soon questions arise. One asks what unity there is in these various episodes, and one can find none except in Miss Cather's sense that here, in the meeting of old and new, is a process of rare beauty. Granville Hicks, "The Case against Willa Cather." James Schroeter ed., *Willa Cather and Her Critics* (Ithaca: Cornell University Press, 1976), p. 145.
- 2 In the present instance she has nothing that could properly be called a plot, but she is wisely content to accept the fact and to depend upon the continuous presence of beauty rather than upon any movement to hold the interest of the reader. Joseph Wood Krutch, "Reviews of Four Novels." James Schroeter ed., *Willa Cather and Her Critics*, p. 61.
- 3 ジェノアの司教 Jacobus de Voragine によって編纂された *Legenda Aurea* の英訳。1483年に Caxton によって印刷された。
- 4 Instead of a cumulative plot the nine books of the novel have sections with titles, each of which starts again, like the separate anecdotes of saints' lives in the 'Golden Legend' . . . with no direct

- connection to what preceded it. Hermion Lee, *Willa Cather: Double Lives* (New York: Pantheon Books, 1989), pp. 270-71.
- 5 T. K. Whipple, "Willa Cather." James Schroeter ed., *Willa Cather and Her Critics*, p. 45.
 - 6 James Schroeter は Cather がフランスの画家 Puvis de Chavannes のフレスコ画を研究中、この着想が頭に浮かんだと語った点を根拠にしている。... the author said the idea came to her while she was studying a fresco by Puvis de Chavannes, and like the fresco the book is a series of static pictures done "without accent." James Schroeter ed., *Willa Cather and Her Critics*, p. 24. In the pages in which landscape and character merge in vivid pictorial narrative there is much more than the *tableau vivant*, the effect of a Puvis de Chavannes mural, for the muralist painted with a purposeful thinness and an exaggerated two-dimensionalism whereas Miss Cather is able to use color in its richest and fullest tones and depth and perspective. E. K. Brown, *Willa Cather: A Critical Biography* (New York: Alfred A. Knopf, 1970), p. 261.
 - 7 As one reads, one seems to be looking at various scenes in a tapestry, rich in material and artful in design. Granville Hicks, "The Case against Willa Cather." James Schroeter ed., *Willa Cather and Her Critics*, p. 145.
 - 8 全ページのうち前半のページについて主な色彩の頻度数を調べてみると、使用回数が多いものでは、白色47回、赤色27回、緑色23回、黒色21回、灰色19回、青色12回、黄色12回が特に目立つ。中間色を入れると、25種類以上の多彩な表現で満ちあふれているが、白色が圧倒的に多く用いられていることは一目瞭然である。
 - 9 白色の象徴的な意味については主に以下の著書を参考にした。Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1984), p. 499. Hans Biedermann, *Dictionary of Symbolism* (New York: Facts on File, 1992), p. 38. J. C. Cooper, *An Illustrated Encyclopaedia of Traditional Symbols* (London: Thames and Hudson Ltd., 1978), pp. 60-61.
 - 10 ラバは象徴的には、王や枢機卿など高貴な人が乗る動物とされる。Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 331.
 - 11 パールには高貴の他に、白色とも共通する魂、純粹、清浄や自己犠牲、信仰、救済、英知などの象徴的意味がある。Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, pp. 360-61. Hans Biedermann, *Dictionary of Symbolism*, pp. 259-60.
 - 12 灰色には利己主義者、自己中心主義者の象徴的意味がある。Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 228.